

ミニ大通 だより

ラジオゾンデが行く

三二大通を西に抜ける
と一八丁目の角。そして
南へ信号を一つ渡ると、
そこに札幌管区気象台。
チエスの駒のような、岬
の灯台のような、白い塔
がのんびりと建っています。
ここから、朝晩、定
時に放たれるのがラジオ
ゾンデ。エアバック風の
白い気球にぶら下がり、
律儀に毎日飛び立って、
気温、気圧、湿度、風向、
風速を観測します。



くぐるくぐる回りながら
「サイナラ」と、上昇
するさまが健気で潔く
て、つい口を開けて、見
送ってしまいます。しま
いにクラクラして追跡を
あきらめるのですが、の
どかに、無防備に空を見
上げるのは、ほんに気持ち
のいいものです。

残雪の藻岩山をバック
に、春めく街を見下ろし
ながら、くぐるくぐる上っ
て、ラジオゾンデは今日も行
きます。空のメッセージ
を集め終えたら、上空三
〇kmあたりで気球は破
裂。計測器はバラシユー
ト降下して、ほとんどが
海に着水するとか。その
あつけないさが、また、好
感度大。揺られる波は穏
やかでありますように。

イル・ポステイノ

大谷 薫

北4西14 ☎272・7277

ミニ大通 だより

いとはんの頃

セピア色の大判写真。
写っているのは、草の茂
る土手に座った二人の少
女。シロツメクサの花束を
もち、お揃いの帽子をか
ぶり、つばにも小さな花
飾り。大きい方が子が小
さな子の肩にそっと手を
かけています。撮影され
ている緊張なのか、穏や
かながら口をこぼして、す
まし顔。伸ばした足が雑
草にすこし埋まり、きつ
と立ちくちくちしているこ
とでしょう。暖かそうな日
射しが降り注いでいます。



端が欠けた台紙には、
「ナニワ寫真館・電話船
場一一八六番」の刻印。
少女たちは、船場の洋服
問屋のいとはんとこいさ
んです。やがて成人し、
いとはんは私の母になりま
した。この前会ったとき、
生家のお隣が帽子会社だ
った、向かいには森本の傘
屋で、その隣が判子屋、
会長宅、布回屋、万年筆屋
と、町内の並びをすべて
そらんじてみせました。
母の中に詰まっているい
とはんの日々は、今も日
射しの中にありました。
こんどの母の日、ミニ
大通でシロツメクサをさ
がしてみようか、と思っ
ています。

イル・ポステイノ

大谷 薫

北4西14 ☎272・7277

ミニ大通 だより

大三元の庭

可愛らしい初夏の日が
射す、六月のミニ大通で
す。爽やかな空気を吸い
ながら、なぜか梅雨の似
合う店を思い出していま
した。



休日の後、本屋の帰
り、濡れた傘の人波をか
わして押し開く「大三元
の真鍮の取っ手。雀狂で
はありません。そこは不
思議なただずまいの中華
料理店。高い天井、水色
の小タイル敷きの床。磨
き込まれた焦げ茶色の卓
上に、青い硝子の醤油さ
しと、くすんだ青の灰皿。

座席は古
い列車の
ように背
もたれが
直立し、
臍脂のピ
ロード張
りの二人
掛け。ひんやりとした店
内は音もなく、口数の少
ない一家が立ち働いてい
ました。窓の外に坪庭。篠
突く雨がアオキにかか
り、庭石に跳ね返ります。
その様子を倦かず眺めて
口にすすり、冷えたビール
と蒸し上りのシウウマ
イはー

大三元は、ご主人が体
調を崩して、店を閉めま
した。たしかに自分がそ
こにいた、記憶の中のな
めらかな場所。戻りたい
のに戻れない場所。思い
出すなら、やさしい光の
初夏に限ります。

イル・ポステイノ

大谷 薫

北4西14 ☎272・7277

ミニ大通 だより

おねがいネムノキ

ポプラの綿毛も飛び終
わり、ミニ大通の雨も降
りやみ、いよいよ短い夏
の出番。



いま時分、京都の山は
むせるほどの緑。その中
にひっそりと、桃色の刷
毛よりの花をつける大木
があります。That'sネム
ノキ。刷毛の毛先は愛ら
しい桃色、根元は白。ふあ
つぶあつぶあつと、小さ
な花火のようで、乙女の
類のようで。花言葉は「歡
喜、夢想、胸のときめき、
安らぎ」...むべなるかな。

しかし。羊歯に似た濃
緑の葉は湿って熟れた熱
帯にふさわしく、しかも
夜には閉じてしまう。ウ
ブで老練、偉くて頑固。
矛盾するネムノキ。
その神秘に魅せられ、
ネムノキはええね〜ネム
ノキほしいわ〜と願っ
ていたら、ある日、庭
の敷石の間に10cmほどの
ネムノキが、信じられん。
大喜びもつかの間、札幌
に越すことになりました。
「寒いからムリでしょ。こ
こに残りなさい。あつさ
り置いてきて十有余年。
勝手にでわるいけれど、い
つまでも色褪せず置いて
ね。なんせ、一途な願い
というものが、私にもあ
った証拠なんだから。

イル・ポステイノ

大谷 薫

北4西14 ☎272・7277

ミニ大通 だより

やがて来る夏

ふだんは朝寝坊な小学
生のくせに、夏休みにな
ると急に早起き人間に変
身するフシギ。昔の私の
ことですが。時間割も宿
題もランドセルも忘れ、
昇る朝日に挨拶して始ま
る、空っぽな一日。解放
感の何たるかを知らず、
軽い背中が少し心細く、
それでも制服のようにか
びる妻わら帽子が表へ誘
います。やわらかい肌は
みるみる焼けて、兄弟皮
むき合戦開始。



子ども頃には「靴下
を脱ぐように」皮がむけ
た、と母が懐かしそうに
話しま
す。そ
のしわ
の寄っ
た白い
細い手
に刻ま
れた数々の夏を、ひとつ
ずつひもときながら、こ
の夏、彼女の思いはどこ
を駆けめぐっているのだ
でしょう。私はいつか、母
の歳に追いつくでしょう
か。そのとき、何を思い出
すのでしょうか。ミニ大
通のことはきつと憶えて
いるはず。
*お知らせ
八月十三日〜三十一
日、保手演拓(ホテハマ・
タク)の作品を集中展示。
自然を題材にした、せつ
なく、ピュアな世界をこ
堪能ください。期間中無
休(一)。

イル・ポステイノ

大谷 薫

北4西14 ☎272・7277